

## 現在社会研究としての歴史教育

— 社会生活史教授の論理と意義 —

梅津正美

(キーワード：社会生活史教授、現在社会研究、「社会科歴史」、中等歴史教育内容改革)

### はじめに—研究の目的・対象・方法—

歴史教育の内容編成の在り方について論じようとするれば、まず、学校教育における歴史教育の意義・性格を明らかにしておかねばならない。なぜなら、歴史教育の意義・目的論が歴史教育内容の選択と構成の論理を実質的に規定するからである。筆者は、歴史(事象)手段の歴史教育観と現在主義的歴史教育観に立ち、学校教育における歴史教育を、「歴史理解を通じた現在社会理解」を意義とする「社会科歴史」として性格づけたい。<sup>1)</sup>「社会科歴史」としての歴史教育の意義は、具体的には次の3つの内実をもつものとして捉えたい。

第1に、子どもが歴史理解を通じて現在の社会構造を理解できることである。

第2に、子どもが歴史理解を通じて社会形成の主体としての人間(他者および自己)を理解できることである。

第3に、子どもが歴史理解を通じて現在の社会問題を理解できることである。

従来の歴史教育内容の構成は、「国家」と「個人」を基本枠組みに、政治・経済・社会・文化の個別内容領域を歴史的時間の連続性において構成していくことが一般的であった。こうした内容構成の背後には、子どもが生きる現在社会は歴史上の一時代であり過去社会との連続性をもっているのだから、歴史を総合的、連続的に理解することによって現在社会もよりよく理解することができる、という歴史教育観があると言えよう。しかし、その内実、歴史における「人間」には国王、政治家、将軍、文化人など「支配層に属する個人」を中心に選択し、彼らを推進力とする「国家体制史」としての構成になっている。また、歴史の動態に関しては、主に中央の政治権力の移動に基づく王朝・国家の交替史により一元的に説明していく構成になっているのである。そのために、子どもたちは、授業を通じて歴史的過去と対峙しても、それを経験知のレベルで共感的に捉えることができないし、過去・現在の日常的な社会生活に政治・経済・社会・文化の相互連関としての社会全体の構造が内在していることも認識できず、支配的な政治体制や、思想・価値、あるいはそれらの推進力と考えるエリートの意思決定に普

通の人々は拘束・統合されていくという決定論的な歴史認識を形成しがちなのである。そして、子どもたちは、経験知のレベルで把握できない過去社会を、自らも参画可能な意思決定や問答の場として捉えることができず、自らをとりまく現在社会の理解や現在社会の諸問題の解決に対する指向性をもたないまま、「歴史的過去についての事実」を網羅的に理解していくことを歴史学習の意義・目的と捉えてしまっているのである。従来の歴史教育内容は、学校歴史教育の「社会科歴史」としての意義・性格と整合的に構成されておらず、それを通じて形成される子どもの歴史認識内容が必ずしも「現在社会理解」に収斂していかないところに最大の問題があると言えるのである。

本研究は、現在社会研究としての社会生活史教授の論理と意義を明らかにすることを通じて、「社会科歴史」のひとつの展開モデルを提示することを目的とする。教授対象としての「社会生活史」は、社会を構成するあらゆる人間・集団の行為が展開する個別・具体的な社会生活上の活動領域や社会生活空間を分析視点にして、特定の時代の諸行為と社会構造との機能的な相関関係および現在に向かって変化してきたその過程を明らかにしていくひとつの歴史の見方・わかり方である。<sup>2)</sup> その教授は、多様な人間・集団の社会生活における諸行為を媒介に、子どもたちに、過去社会の認識と現在社会の認識とを接続させ、現在社会の構造的性質の理解やそのもとでの自己の行為選択の省察を有効に促して、「社会科歴史」の展開を保証すると考えるのである。

研究対象は、元アメリカ合衆国教育局指導官フランク・オールウェイズ(Frank Alweis)により開発された前期中等学校(第7・8学年)用アメリカ社会史学習プログラム『私たちの社会と文化の歴史—アメリカ研究』(Our Social and Cultural History: American Studies, 1977年刊行、以下ではASと略記する)である。対象選定の理由は、ASが、「現代アメリカ研究」として、人間の社会生活における諸経験を分析視点にした歴史学習を構想しており、筆者の研究目的に合致したプログラムであると判断されたからである。

前記の目的を達成するために、次の方法を採用する。

- ① AS の教育目標、内容構成、授業構成の実際を記述し、その特徴を指摘する。
- ② AS の社会生活史教授の原理を明らかにする。
- ③ 現在社会理解を目的とする「社会科歴史」の展開という観点から、社会生活史教授の意義を明らかにする。

## I 社会生活史教授の実際

### 1. 教授目標の構成とその特徴

AS の教育目標は、次のように設定されている。<sup>3)</sup>

#### 理解目標

##### ① テーマ1 「私たちの社会の歴史」の理解目標

人間の日常生活 (everyday life) における諸経験を視点に、それらに影響を与えてきた社会的諸条件 (social conditions)、社会発展の過程、ならびにアメリカ的価値の形成と変化の特徴を明らかにすることを通じて、現在の私たちの社会を理解する。

##### ② テーマ2 「私たちの文化の歴史」の理解目標

人間の文化的諸活動 (cultural activities) を視点に、時代とともに変化してきたアメリカ人の経験・価値観・感情の特徴を明らかにすることを通じて、現在のアメリカをよりよく理解する。

#### 技能目標

次のような諸技能を発達させる。

主要観念の選択、視覚教材の解釈、用語や概念の発達、事実と意見の明確化、推論、価値の決定、概念や意見の比較、因果関係の明確化、付加的な情報の収集

#### 情意目標

- ① 歴史上の諸事件・諸問題・諸行為の背後にある価値観や信念を批判的に吟味する。
- ② 現在の自分自身の価値観や信念を発見する。

AS における中核目標として提示されているのは、歴史学習を通じて子ども自身が自己の行為決定の指針となる「価値観・信念」を獲得していくことである (情意目標②)。子どもが発見すべき価値観・信念は、個人的なものとしてではなく、「アメリカ的価値観・信念」として想定されている。こうした価値観・信念は、多様なアメリカ人の社会生活における諸行為の変化のパターンと、経済・社会・政治・価値観・人口などにおよぶマクロな社会変動との相関関係、およびそこから析出してくる歴史的・社会的問題を理解し吟味していくことを通じて浮き彫りになると考えられ、それらが主要な知識的・価値的理解内容として配置されている (理解目標①②、情意目標①)。そして、こうした知識的・価値的目標構成を子どもが円

滑に達成していくための思考技能目標として重視されているのが歴史解釈力、批判的思考力、価値決定力である。

### 2. 内容構成とその特徴

AS の全体構成を示したものが、表 1. である。<sup>4)</sup>

表 1. AS の全体構成

テーマ1. 私たちの社会の歴史		
単元1	過去の私たちのフロンティア	(10時間)
単元2	公立学校	(14時間)
単元3	宗教	(9時間)
単元4	労働	(8時間)
単元5	家族	(10時間)
単元6	女性	(10時間)
単元7	都市と郊外	(9時間)
テーマ2. 私たちの文化の歴史		
単元8	娯楽とマス・メディア	(11時間)
単元9	建築	(7時間)
単元10	絵画	(14時間)
単元11	文学	(9時間)
単元12	音楽	(11時間)

[括弧内は、各単元の授業配当時間。]

また、AS の教育内容を、教科書の目次と教科書記述から、次の項目に応じて抽出し、整理したものが、表 2. である。<sup>5)</sup>

- a. 「単元の学習の鍵問題 (key issues)」
- b. 「小単元名と考察年代」
- c. 「単元の学習を通じて吟味する価値観・信念」

表 1、表 2 を通じて、AS の学習主題の選択と内容編成の特徴について、主要な 3 点を指摘できよう。

第 1 に、学習主題の選択と構成に関する特徴である。

AS の単元名になっている学習主題は、教科書構成の上では、「社会」と「文化」という 2 つの内容カテゴリーによって分けられているけれども、子どもの社会史的認識形成のための歴史分析視点の機能別のタイプから見れば、大きく 3 の内容領域で構成されていると言うことができる。一つには、単元 1 および単元 7 から成る、過去から現在までに拡大してきた「アメリカ人の主要な社会生活空間 (生活の場) (フロンティアの漸進から都市型社会へ) に関する内容領域である。これを「社会生活拡大史」と呼ぼう。二つめには、単元 2・3・4・8～12 から成る「アメリカ人の社会生活における主要な活動領域」に関する内容である。これを「社会生活領域史」と呼ぼう。「主要な活動領域」は、アメリカ人・アメリカ社会を理解するという AS の歴史学習の目標・観点から、アメリカ人の「身体的・物質的生活領域」を代表する「労働」領域と、育ち方やものの考え方に関わる「精神的・文化的な生活領域」を代表する「教育」「宗教」「娯楽・大衆文化」領域から単元主題が構成されている。三つめは、単元 5 および単元 6 の内容で、家族・女性をアメリカの社会構造と価値観・信念を体現する「基礎的社会集団」と見なし教育内容化している。単元 5・6 の小単元レベルの主題を見ると、「家族」単元ではその構造・機能・役割

表2 ASテーマ1「私たちの社会の歴史」の内容編成

<p>単元1. 過去の私たちのフロンティア</p> <p>a. フロンティアはアメリカ民主主義をどのように形づくったか？</p> <p>b. 小単元1 漸進していくフロンティアとは何か？：1700年代—1890年</p> <p>小単元2 フロンティアにどんな人達が移動したか？：1700年代—1890年</p> <p>小単元3 フロンティアはアメリカを民主的にしたか？：1700年代—1890年</p> <p>c. 開拓精神, 民主主義, 自立自尊</p> <p>単元2. 公立学校</p> <p>a. 我々はどのようにしてすべての者に対する教育の機会均等を達成できるのか？</p> <p>b. 小単元1 今日あなたは学校で何を学んでいるか？：現在</p> <p>小単元2 私たちの学校はどのようにして今のよう学校になったのか？：1600年代—現在</p> <p>小単元3 私たちの学校は成功しているか, 失敗しているか？：現在</p> <p>小単元4 なぜ私たちの学校はすべての生徒に対して有効に働いていないのか？：現在</p> <p>小単元5 教育の機会均等は実現可能なのか？：現在</p> <p>c. ナショナル・アイデンティティ, 公教育と教育の機会均等, 統合教育, 多文化教育</p> <p>単元3. 宗教</p> <p>a. 宗教は変化する社会のニーズにどのように応えてきたか？</p> <p>b. 小単元1 「信仰の自由」概念はどのように発達してきたのか？：1600年代—1700年代</p> <p>小単元2 「政教分離」の意味は何か？：1700年代後半—現在</p> <p>小単元3 宗教指導者は変化する社会のニーズを満たすためにどのような試みをおこなっているか？：1830年代—現在</p> <p>c. 信教の自由, 政教分離, 多民族・多文化の共存</p> <p>単元4. 労働</p> <p>a. 私たちは大量生産世界の労働に満足感を享受できるか？</p> <p>b. 小単元1 初期アメリカでは労働者たちは自分の仕事に対してどのような感情をいだいていたか？：1600年代—1700年代</p> <p>小単元2 大量生産システムはアメリカの労働者の労働観をどのように変えたか？：1800年代後半—1900年</p> <p>小単元3 現代の流れ作業は労働者の仕事に対する態度にどのように影響しているか？：1900年代初頭—現在</p> <p>小単元4 現代科学はアメリカの労働様式をどのように変化させているか？：現在</p> <p>c. 勤勉協同, 物質的豊かさの追求, 自己実現, 効率主義・科学主義</p> <p>単元5. 家族</p> <p>a. アメリカの家族はどのように変化してきたのか？</p> <p>b. 小単元1 アメリカの家族は時代とともにどのように変化してきたのか？：1700年代—現在</p> <p>小単元2 アメリカ人の生活で家族はその重要性を失ってしまったのか？：1700年代—現在</p> <p>小単元3 アメリカ女性の生活にいかなる変化が起こったか？：1700年代—現在</p> <p>小単元4 親と子は互いに理解しあえるのか？：現在</p> <p>c. 協同労働, 勤勉節約, 愛情, 両性の平等, 自己実現, 物質的豊かさの追求, 価値多様化</p> <p>単元6. 女性</p> <p>a. 女性が平等獲得にむけての闘いに関与するのにどれほどの長い道程があったか？</p> <p>b. 小単元1 女性たちは何を望んでいるのか？：1800年代—現在</p> <p>小単元2 政治的平等にむけての闘い：1800年代—現在</p> <p>小単元3 経済的平等にむけての闘い：1800年代—現在</p> <p>小単元4 社会的平等にむけての闘い：1800年代—現在</p> <p>c. 両性の平等, 女性の政治参加, 性役割分化, 自己実現</p> <p>単元7. 都市と郊外</p> <p>a. 私たちの都市はより住みやすくてできるのか？</p> <p>b. 小単元1 アメリカはどのようにして都市型国家になっていったのか？：1900年代初め</p> <p>小単元2 都市生活は移民にとってどのようなものだったか？：1900年代初め—現在</p> <p>小単元3 大都市に未来はあるか？：1900年代初め—現在</p> <p>小単元4 スーパー・シティ時代の生活：1960年代（現在）</p> <p>c. 物質的豊かさの追求, 多民族・多文化の共存, 自然との調和, 効率主義・科学主義</p>
---

が、「女性」単元では性役割・両性平等・政治参加が内容軸として選択されている。単元5・6は、単元1・7での「社会生活拡大史」教授と、単元2・3・4・8～12での「社会生活領域史」教授で形成される歴史認識内容を、家族・女性というアメリカ社会の基礎的集団から捉え直し、接続・統合する機能を果たしているのである。各単元の小単元レベルの主題を通観すると、3つの内容領域とも、人種・民族、性、階級、年齢を主要なカテゴリーとする多様なアメリカ人の視点から考察できるよう主題構成がなされていることが分かる。また、各小単元主題からは、多様なアメリカ人の社会生活空間や社会生活上の活動領域における諸行為が、社会集団・階層関係や価値観・信念などの社会的・文化的構造の変化、民主

的政治制度や法体系の発展といった政治的構造の変化、あるいは産業社会の発展といった経済的構造の変化との因果関係において考察できるようにも選択・構成されていることが分かるのである。

第2に、社会的論争問題によって教育内容が編成されていることである。各単元の学習のための「鍵問題」に典型的に表現されている論争問題に基づく内容編成は、現代のアメリカ社会は、生活様式や生活意識、生活空間の選択にあたって、価値観・信念の対立や葛藤に直面しているというAS開発者の「歴史学習における課題の現在性の自覚」を明確に反映したものになっている。各単元主題に関わる主要な論争問題を、多様な人々から成るアメリカ人が植民地時代以来歴史過程の中で形成してき

た様々な「アメリカ的価値観・信念」を基準に、子どもが吟味し、意思決定していけるような内容編成が行われている。配列されている「アメリカ的価値観・信念」は、論争問題に一元的な解決の指針を与える絶対不変の価値基準としてではなく、例えばナショナル・アイデンティティと多民族・多文化共存、自然との調和と科学主義・物質主義のように、対立的観点を含む選択的価値基準として提示されているのである。

第3に、時代区分に関する特徴である。ASでは、学習主題ごとに普通のアメリカ人の社会的・文化的行為と価値観・信念の特質・変化を顕著に読み取れる時代が選択的に取り上げられているのであるが、時代区分の基本的枠組みになっているのは、1800年前後と1900年前後を転換点に、17・18世紀－19世紀－20世紀と時代を大きく3つに区切る仕方である。こうした時代区分は、アメリカ史を、事件や個別領域によって捉えていくのではなく、政治体制や法体系、経済組織、社会集団や階層の構成、科学技術水準、さらには人々の価値観・信念にわたる社会全体の構造変動の過程として総合的・包括的に捉えていくための枠組みとして設定されているのである。<sup>6)</sup>

### 3. 単元の展開とその論理

ASの学習展開の実際とその論理を明らかにするために、主題に現れた3つの内容領域ごとの単元展開、すなわち「社会生活拡大史を視点にした単元展開」、「社会生活領域史を視点にした単元展開」、「社会生活領域史と社会生活拡大史とを統合した単元展開」を、それぞれの展

開の論理を明瞭に読み取ることのできる5つの小単元の授業展開計画により示す。

#### (1) 社会生活拡大史を視点にした単元展開とその論理

社会生活拡大史を視点にした単元展開の実際を、単元1の中の小単元2と単元7のうち小単元1の授業展開計画[表3.7]を通して示す。

単元1の小単元1における、フロンティア・ライン移動の画期をなした主要な出来事・事件の概要と意味を、子どもたち自身が調べ理解していく学習<sup>8)</sup>を受けて、小単元2では、西漸運動の画期にフロンティア・ラインの拡大に主要な役割を果たした具体的な人物群を選択して教材とし、子どもたちが、彼らの行為や意識を記した旅行記・小説・ルポルタージュ・手記などの読み取りを通じて、行為の意味と行為を通して浮き彫りになるアメリカ社会の構造変動を認識していく展開となっている。パートAでは、西漸運動に関わった人間群が、概括的に確認される。パートBでは、19世紀初頭の時期の西漸運動で主役をなした人物群として毛皮猟師と山男の活動が確認される。毛皮猟師と西漸運動については、19世紀初頭の時期に、彼らがアシュレー商会のような毛皮貿易会社と系統的に結び付き、ロッキー山脈とその周辺を舞台に、ビーバーの毛皮と東部都市の工業製品とを交換する一大交易圏を形成し、この地への人の移動の原動力をなしていたことが教育内容になっている。山男と西漸運動については、彼らが西部移住者の有効な水先案内人としての役割を果たしたことに加えて、インディアンを駆逐に荷担したことや彼ら自身が東部都市の論理に組み込まれ本来の自由や素朴さを失っていったことなど西部開拓

表3. 社会生活拡大史を視点にした単元展開

単元パート	主な学習問題・学習活動	主な学習内容
単元1・小単元2	A 1800年代半ば、ボストンからオレゴンをめざした若者フランシス・パークマンの旅行記を読んで、次の質問に答えなさい。 1. 1846年に、パークマンはセントルイスで西部をめざす幾タイプかの人々に出会った。貿易商人、ギャンプラー、開拓者、山男、毛皮猟師、黒人、インディアンなどである。彼らのうちで、どの人達が西部に定着したと考えますか。そう考える理由も説明しなさい。 2. 1848年にカリフォルニアで金鉱が発見された。このことに触発されて西部へやってきた人々のタイプを、パークマンのリストから指摘しなさい。そう考える理由も説明しなさい。	農夫。農業は定まった土地で、生産を上げ、収益をあげてくことをめざすから。 貿易商人。西部で農業生産が活発になれば、そ東部の工業製品と交換する仕事も必要になる。 ギャンプラーや開拓者。一攫千金を求めて、カリフォルニアにやってきたらう。
	B 毛皮猟師は西漸運動の草分け的存在である。そのことを念頭に、「ミズーリ・リパブリカン」のアシュレー商会の求人広告を読んで、質問に答えなさい。 1. 1800年代のはじめに、西部で毛皮猟師の求人が多かったのはなぜですか。 ジェデディア・スミス、キット・カーソン、ジム・フリンジャーらは西部の代表的な山男として知られている。バーナード・デ・ポートが著わした「決定の年：1846年」の引用文を読んで、次の質問に答えなさい。 2. なぜ山男は西漸運動の歴史において重要なのですか。 3. デ・ポートは、山男を「残酷な商売の代理人だが、彼らもまた犠牲者である。」と記述しているが、なぜそう言えるのですか。	東部の先進地帯では、ビーバーの毛皮に対する需要が大きかった。毛皮の獲得に猟師の力が必要だった。  西部の山岳地を熟知していた彼らが、西部探検の案内人として役割を果たした。 山男は、西部開拓の先端で、インディアンと激しく戦い、彼らの土地を奪っていった。しかし山男が本来持っていた自由も奪われていった。

C	<p>カリフォルニアでの金鉱の発見は、西部の法律や秩序にどのような影響を与えたのか。ニューイングランドの医師夫人ルイス・クラッペのルポルタージュを読んで、次の質問に答えなさい。</p> <p>1. なぜ金鉱の町では暴力や犯罪が多かったのですか。</p> <p>2. なぜ、カリフォルニアにやってきた人の多くが金持ちになるのに失敗したのですか。</p>	<p>砂金の獲得をめぐるトラブル。多くの者が一度に新天地にやってきた混乱。</p> <p>一攫千金を求めてやってきた者たちは、生産活動に関わらなかった。金を手に入れた者はわずかで、多くの者はやってくるための経費も回収できなかった。</p>
D	<p>南北戦争の前後の時期には、大平原が農民のフロンティアとなった。まず、ホームステッド法の要約文を読んで、質問に答えなさい。</p> <p>1. この法律は人々の西漸運動をどのように奨励しましたか。この法律が5年間の定住開墾条項を設けたのはなぜだと思いますか。</p> <p>次にトーマス・クラークの「フロンティアアメリカ」を読みなさい。この物語は、西部開拓農民の生活ぶりをよく伝えている。物語を読んで、次の質問に答えなさい。</p> <p>2. 大平原の家族が直面した困難のうち、最も深刻な困難は何だったと思いますか。</p> <p>3. 大平原の家族が直面した困難は、政府に対する彼らの観念にどのような影響を与えたと思いますか。</p>	<p>農民や労働者の西部で土地を持って独立する夢をかき立てた。未開墾の土地の開墾条件をつけることで西部開拓が進むものと考えられた。</p> <p>荒地の開墾、粗末な芝土の住居、強盗団など</p> <p>自営農民になる夢が破れた者は、政府に対する不満を持つようになったのではないか。</p>
E	<p>西部開拓時代に牛を追い続けたカウボーイの手記を読んで、次の質問に答えなさい。</p> <p>1. カウボーイはなぜ西部の荒野で牛を追い続けたのか。彼らの牛飼いの役割は何だったか。</p> <p>2. カウボーイと定住者の間に起こった暴力的な争いの原因は何だったか。</p> <p>3. カウボーイが直面した多くの困難にも関わらず、彼らの性質がアメリカン・マインドを代表していると思えるのはどんな点か。なぜ、人々はカウボーイにアメリカンマインドを見出したか。</p>	<p>東部に形成された工業都市への食肉供給のために西部では牛飼いが行われた。カウボーイはその先頭で活躍した。牛追いによる土地の荒廃と水をめぐる問題。</p> <p>自由と正義の気質。素朴な人間感情。</p> <p>工業化や都市化の中心地域であった東部地方では、規律や人工物が増えていき、アメリカ本来の自由さや素朴さが失われつつあり、人々は西部のカウボーイに本来のアメリカを見出そうとした。</p>
総括討論	<p>5. 西部の開拓者達は移住の地でしばしば自分達の手で法律や規則を作った。そのようにしなければならなかった理由は何か。現在のアメリカには、自分達で法律や規則を作り、社会問題に対処している状況があるだろうか。(討論課題1・2・3・4は省略)</p>	
単元7・小単元1	<p>A 1840年から1960年の人口動態統計をみて、次の質問に答えなさい。</p> <p>1. アメリカにおける都市化の展開において、なぜ1900年から1920年が重要な時期なのか。</p> <p>2. 統計表の各年次の実数を読むと、農村人口も着実に増えている。しかし、アメリカは都市型国家だと言われる。グラフが示す事柄を根拠にその理由を説明しなさい。</p>	<p>アメリカにおける農村人口と都市人口がこの時期に逆転した。</p> <p>19世紀後半からアメリカの人口増加が著しい。その中でも特に都市居住者の増加率が急激に伸びている。</p>
B	<p>都市人口の増大のひとつの理由に、農村部からの人口移動や移民の増大がある。1900年代初頭に人々はなぜ都市をめざしたのか。まず、黒人移住者のシカゴ新聞への投稿記事を読んで、次の質問に答えなさい。</p> <p>1. なぜ、この黒人は、北部新興都市のシカゴをめざしたのか。</p> <p>2. この投稿記事は、アメリカが第一次世界大戦に参戦した1917年に書かれている。大戦参戦は、北部都市への黒人移民にどのような影響を与えたと考えますか。</p> <p>次に、ニューヨークにやってきたロシア移民の少女の手記を読み、質問に答えなさい。</p> <p>3. 少女はニューヨークにどんな期待を見出したのか。</p> <p>4. この手記の後半では、同じ著者が、「私の黄金郷はどこにあるのか？私のアメリカはどこにあるのか？」と訴えている。このメッセージに込められた意味をどのように考えますか。</p> <p>ニューヨークへのドイツ系移民ルイス・アダミックの手記を読み、質問に答えなさい。</p> <p>5. アダミックがアメリカ移民後、農村にではなく都市に期待をかけて生活を始めたのはなぜですか。</p> <p>6. アダミックが、マンハッタン・スカイラインを見て自分に対する誇りを感じたのはなぜですか。</p>	<p>南部での黒人に対する厳しい差別、就職難による。戦争需要で、北部都市では、南部で得られない新しい仕事の機会が増えたのではないか。</p> <p>黒人の北部移住で、彼らは差別や迫害に合う機会も多かったのではないか。</p> <p>恐怖からの解放。アメリカの物質的豊かさ。自由の享受。経済的成功の機会。就職難や貧富差、社会的不平等の存在に、彼女は幻滅したのではないか。</p> <p>アダミックをはじめ同郷の移民の多くは、農村の出身者で教育を受けていない者が多かった。そうした移民でも、鉱山労働や建設業など都市には就業の機会が多かった。</p> <p>アメリカの都市には、同郷者のコミュニティがあり世話をすることができた。</p> <p>アダミックが就業した鉄鋼業は肉体労働でつらいことも多いが、自分の労働によって都市が作られていくことに誇りと自信を感じた。</p>
総括討論	<p>3. 1900年以降のアメリカ都市へのニューカマー達は、どんな期待を見出していたと思いますか。彼らはその期待を裏切られたと思いますか。そのように考える理由は何ですか。(討論課題1・2は省略)</p>	

に伴う暗部や矛盾が教育内容になっている。毛皮猟師や山男の活動の西漸運動における意味理解を通じて、19世紀初頭におけるフロンティアでは、移動型の交易社会が形成されていたという社会構造の特質も教育内容になっていくのである。パートCでは、1848年のカリフォルニアのゴールドラッシュ以降の鉱山フロンティアの展開に関わった人物群の活動と結果、およびそれを通じた流動性の高い鉱山フロンティア社会の特質が教育内容になっている。パートDでは、1860年ごろから19世紀末ごろまでの大平原への農業入植者の生活様式が物語教材を通じて学習されるとともに、大平原フロンティアでは定住型の農業社会が形成されたという社会構造の特質が学習されるのである。パートDにおけるカウボーイは、大平原フロンティアにおける移動型社会と定住型社会の併存と両者の対立・葛藤の構造、工業製品を供給する東部都市型社会と食料を供給する西部農村型社会の関係性と差異性を理解する典型教材として取り上げられている。そして、小単元2は、総括討論課題5により、西部・フロンティアで形成されてきた民主主義の価値と制度、自立自尊の気風を教育内容として再確認するとともに、そうした「アメリカ的価値観・信念」を拠り所に、現在のアメリカ民主主義の理念（価値）と制度を反省的に吟味していく学習で締めくくられるのである。討論課題5に基づく話し合い学習は、小単元3で展開する、「西部・フロンティアで培われた自由・進取の気性・民主主義といった考え方や生活様式が東部に影響を与えながら、アメリカ的な民主主義・個人主義・ナショナリズムが形成されていった」という、ターナー（Frederic Jackson Turner）の「フロンティア学説」<sup>9)</sup>に基づいて西漸運動の歴史を吟味していく小単元3の学習の導入としても機能しているのである。

単元7の小単元1は、19世紀後半以降、都市化していくアメリカ社会の空間的・質的变化を、黒人、移民といったエスニック・マイノリティの行動と意識を通じて学習していく展開になっている。パートAで、人口統計に基づいて19世紀後半以降のアメリカ社会の人口増加と都市化という大きな社会変動を数量的に確認した後、パートBでは、そうした社会変動を象徴する社会生活空間としてシカゴとニューヨークが選択され、そこに移住し生活した黒人、ロシア系移民、ドイツ系移民が直面した社会生活における問題状況と彼らの行為パターンが、彼らの手記を通じて考察される。都市移住者の個人生活史を通じて浮き彫りになるのは、都市居住者の人種・民族的多様性、高い社会的移動性、社会的不平等の存在といった都市型社会の構造的な特質である。また、学習問題3・4で考察されるロシア系移民少女と、学習問題5・6で考察されるドイツ系移民労働者との対比からは、都市生活において個人が何を望ましいことと考えるかの価

値観や意識の多様性と葛藤が学習されるのである。小単元2の討論課題3は、そうした都市型社会におけるエスニック・マイノリティの生活意識の多様性と葛藤をあらためて吟味するとともに、彼らをめぐる社会的不平等の存在についての討論学習を促している。

単元1と単元7を貫いて見て明らかになる学習展開の論理は、次のように整理することができよう。学習は、植民地時代から1890年ごろまでの西漸運動と、1900年ごろ以降の都市化を視点とするアメリカの社会生活空間の拡大過程の画期に生じてきた問題状況に対して、個人あるいは集団がとった典型的な問題解決の行為の意味や意識の具体を、手記、伝記、ルポルタージュなどの物語教材の読み取りを通じて明らかにするとともに、行為の意味理解を通じて浮き彫りになる、移動型交易フロンティアから定住型農業フロンティアへ、農村型社会から都市型社会へ、というアメリカの社会生活空間の拡大過程と連動した社会構造の質的变化を認識できる展開になっているということである。単元1・7の各小単元の最後に用意されている学習総括のための討論課題は、各小単元の学習を通して明らかになる、開拓精神、自立自尊、民主主義、多民族・多文化共存、社会的上昇志向といった「アメリカ的価値観・規範」を子どもたち自身が吟味・反省していく討論学習を促すように設定されているのである。

## (2) 社会生活領域史を視点にした単元展開とその論理

社会生活領域史を視点にした単元展開の実際を、「労働」領域に関する単元4の中の小単元1・2の授業展開計画〔表4<sup>10)</sup>〕を通して示す。

小単元1では、1700年代の植民地アメリカにおけるピューター職人家族の手工業生産活動が徒弟・若手職人の視点から取り上げられ、徒弟制と家内手工業の生産形態のもとでの労働活動と労働観が学習される。「植民地社会では、家族が労働・生産の基本単位をなしたこと」、「若者は徒弟制を通じて技術を修得したが、親方に対する経済的・社会的自立性を欠いていたこと」、「労働・職業に基づく社会的移動性が低かったこと」などの労働を通してみた植民地社会の特質が主な教育内容になっていく。また、小単元1の総括討論問題4は、植民地社会における徒弟制に基づく職人労働の在り方を、植民地時代の社会構造と、子どもが保持する「労働を通じた自己実現」という労働観とを共に考慮しつつ吟味し評価していく討論学習の展開を促すものになっている。

小単元2では、機械による大量生産方式の生産形態のもとでの労働活動の実際、労働観、工業化社会の特質が、労働者階級の視点から考察される。パートAは、18世紀末にホイットニーが確立した初期の大量生産方式を事例にしたアメリカの初期工業化時代における考察であり、

表 4. 社会生活領域史を視点にした単元展開

単元	パート	主な学習問題・学習活動	主な学習内容
単元4・小単元1		<p>植民地時代を生きたピューター職人の仕事場の挿絵と彼らの生活様式を著した歴史書からの引用文を参考にして、次の質問に答えなさい。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 徒弟や徒弟期間を終えた若手職人が苦しい仕事に精を出す最大の理由は何ですか。</li> <li>2. 親方やその妻、娘が苦しい仕事に精を出した理由は何ですか。</li> <li>3. 植民地アメリカの親方の店での作業の様子は、現在の労働者の生産の様子と比べてどのような違いがありますか。</li> </ol>	<p>手工業親方にふさわしい技術のみがき、お金をためて自分の店を持つため。</p> <p>妻や娘も家内生産活動の分担者である。</p> <p>徒弟や若手職人は、親方家族に統合されていた。手工業親方の家では、家庭生活と労働が一体化していた。</p>
	総括討論	<p>4. あなた方が学習してきた植民地時代の徒弟や若者は、自分の仕事に大いに満足していたと思いますか。それとも不満を抱えていたと思いますか。そのように考える理由は何ですか。</p> <p>(討論課題1・2・3は省略)</p>	
単元4・小単元2	A	<p>1798年、連邦政府と28か月でライフル1万挺を製造する契約を結んだイーライ・ホイットニーの伝記を読んで、次の質問に答えなさい。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. ホイットニーによれば、大量生産の秘訣は部品の正確な長さである。それはなぜ重要なのか。</li> <li>2. 当時のジェファソン大統領は、大量生産方式の利点は何だと考えていますか。</li> <li>3. 植民地時代の手工業親方は、なぜ大量生産方式を利用しなかったと思いますか。</li> </ol>	<p>部品の互換性が、機械の大量生産を可能にした。</p> <p>製造に伴う時間と熟練労働を節約して、安く均質な製品を作ることができたこと。</p> <p>製品が故障しても部品交換で再利用ができたこと。</p> <p>生産量は少なくても確かな技術に基づく良質の製品を作ることが重要だと考えた。</p> <p>植民地時代には、製造業に対するそれほど大きな需要がなかった。</p>
	B	<p>大量生産時代の到来に直面した熟練機械工の1883年の手記を読んで、次の質問に答えなさい。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 大量生産は、徒弟制度をどのように解体していったのですか。</li> <li>2. 大量生産は、労働者の技術水準や生産コストにどのような影響を与えましたか。</li> <li>3. もしあなたが若い労働者だったら、旧来の徒弟制度と工場大量生産制度のどちらの仕組みのもとで仕事をしたいですか。</li> </ol> <p>次に、1855年の綿織物工場管理者の手記を読んで、質問に答えなさい。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>4. 管理者は手記の中で「労働者は機械と同様に管理できる。労働者は機械の一部品と同じである」と言明している。もし、あなたがこの管理者のもとで働く工場労働者だったら、管理者のこの言葉に、どのような言葉を返しますか。</li> <li>5. 工場管理者の言葉は、19世紀後半の労働組合の結成の事実とどのように結び付いていますか。</li> </ol> <p>これまで、主に工場労働者に焦点をあてて19世紀の労働の特徴について学習してきたが、歴史家は19世紀末から人々の職業の移動の可能性が高まったことを指摘している。このことに関する歴史家の著作の引用文を読んで、質問に答えなさい。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>6. 18世紀植民地社会を代表するアメリカ人ベンジャミン・フランクリンは、「あなたが一生懸命働いた分だけ、あなたは確かな地位と報酬を受けることができる」と言明し、職業の自由選択を理想と考えていた。フランクリンの信念は、植民地社会の労働の実際とどのようにあてはまるか。19世紀末の労働についてはどうか。今日の労働についてはどうか。</li> </ol>	<p>工作機械による大量生産は、不熟練労働者の雇用を増やした。縫製工場では、親方・徒弟による生産に代わって、母と娘による生産が行われた。</p> <p>大量生産方式によれば、不熟練労働者による低賃金での生産でも均質の商品を得ることができた。そして、価格を下げることもできた。</p> <p>○徒弟制度のもとで働きたい。親方のもとでの修行は厳しいが、しっかりと技術が身につく。将来の独立が期待できる。徒弟も親方家族の一員として教育してもらえる。</p> <p>○工場大量生産制度のもとで働きたい。不熟練であっても雇ってもらえる。女性でも就職して、賃金を得ることができる。自分の得た賃金で、親から独立した自由な生活を送ることができる。</p> <p>○労働者の人間性を否定する許せない発言だ。</p> <p>○工場労働でも、労働者の人間性を大切にしたい。生産業のしくみを設けるべきだ。</p> <p>大量生産方式の工場労働における待遇の改善と人間性の回復をめざして、労働組合は結成された。</p> <p>○植民地社会では職業のタイプも限られ、固定性も高かったため、フランクリンの考えは植民地社会では異質なものではなかったか。</p> <p>○19世紀末には、職種も多様化し、職業の移動性も高まり、ホワイトカラー職に就く者も出現してきた。フランクリンの信念に合う労働状況になってきたとも言えるが、労働者間の労働条件や賃金格差も大きくなっている点からみると一概にあてはまっているとも言えない。</p> <p>○現在では、職業の専門化・細分化が一層ひろがっていて、フランクリンの信念がそのまま通用するかは疑問である。現在では職業選択に関する信念は多様化している。</p>
	総括討論	<ol style="list-style-type: none"> <li>3. 19世紀後半から発達した大量生産方式が労働の在り方や社会にもたらした利点と欠点は何だと思えますか。</li> <li>4. 19世紀後半から発達した大量生産方式は労働者の労働に対する態度や意識をどのように変化させたと思えますか。</li> </ol> <p>(討論課題1・2は省略)</p>	

パートBが、19世紀後半の機械工場における労働活動を事例にした成熟工業化時代における考察である。パートA・Bの学習を通じて、「工業化社会では、経営・管理と労働とが分離していくこと」、「分業と機械の利用により労働者の技術レベルが低くなっていくこと」、「女性の家庭外労働が促進されること」、「労働・職業に基づく社会的移動性が高くなること」、「労働における人間障害が生じてきたこと」など労働を通して見た工業化社会の特質が教育内容として習得される。こうした教育内容は、小单元1で徒弟制のもとの手工業労働を視点に考察した植民地社会の特質との対比においてより明確になってゆく。パートBの学習問題6は、労働を通して見た植民地社会と工業化社会の特質および労働観の比較を意図的に展開するための学習問題になっている。单元4の総括討論問題3・4は、工業化社会で生み出された個人主義的・効率主義的で、社会的上昇志向の強いアメリカ的労働観を吟味し評価していく討論学習の展開を促している。

小单元1・2の考察から明らかになる单元4の学習展開の論理は、植民地時代から1900年前後の工業化時代における「労働者階級の労働行為・労働観」「生産形態」「社会全体の構造変動」を枠組みに内容を構成し、それら内容の連関を、植民地時代・工業化時代を生きた典型的な労働者の伝記・手記の読み取りを通じて明らかにし、その上で総括討論によって個人主義、効率主義、自己実現、社会的上昇志向といった労働をめぐる「アメリカ的価値観・信念」を吟味し評価していく学習へと展開していくというものである。

### (3) 社会生活領域史と社会生活拡大史とを統合した单元展開とその論理

社会生活領域史と社会生活拡大史とを統合した单元展開の実際を、「家族」を取り上げた单元5の中の小单元1・2の授業展開計画[表5.11]を通して示す。

小单元1では、A・B・Cの各学習パートで、1700年ごろ、1900年ごろ、そして現在に生活した典型家族のケーススタディが行われる。各時代の典型家族として取り上げられているフレッチャー家、トムソン家、ジョンソン家の選択根拠は、それら家族が、アメリカ史における社会生活空間の拡大過程と社会変動の影響を受けた家族の形態・機能・価値観を例証しているということである。フレッチャー家が生活した植民地時代のニューイングランド・マサチューセッツの農村、トムソン家が生活した、合衆国中西部の農業州アイオワにあり1900年ごろには都市化の進行が顕著だったクレアモント、ジョンソン家が現在において生活している合衆国大西洋岸の工業州ニュージャージーにあるカムデンは、アメリカ史を通じた社会生活空間の拡大過程を例証する場所と見ることができる。また、それらは、農業・村落社会から

工業・都市社会への社会変動を例証する場所でもある。拡大家族、家父長制家族、経済・教育・宗教・娯楽・保護・裁判の諸機能を内部に統合しているフレッチャー家の形態・機能上の特質は、植民地時代の家族を例証しているし、拡大家族ながら個人的・パートナー的・愛情的な関係を基本におくトムソン家の特質は、1900年代までの自営で業をなす中流家族を例証している。また、核家族、共働き家族、教育・娯楽などの機能を家庭外の社会機関に委譲したジョンソン家の特質は、現代の下級ホワイトカラー家族を例証している。小单元1の3家族のケーススタディを通じて、アメリカ史における社会生活空間の拡大過程、社会変動、家族の形態・機能の変化が教育内容として習得されるわけである。そして、小单元1の総括討論課題1・2に基づくクラス討論では、子どもたちは、資料教材の挿絵が示す、核家族で、子供への愛情に満ち、夫が外での仕事で収入を得て家族を扶養し、妻が家事と子供の養育を分担する中産階級家族を19世紀的アメリカ家族像のモデルとし、それをたたき台に、植民地時代の家族観、あるいは現在の自己の家族観を吟味し、評価していくのである。

小单元1の考察から明らかになる单元5の学習展開の論理は、アメリカの社会生活空間の拡大過程における典型家族の生活様式を視点に工業化に伴う社会変動のもとの家族の形態・機能・価値観の変化を明らかにし、その上で総括討論によって過去および現在の家族観あるいは自己の家族観を吟味し、評価していくというものである。

## II 社会生活史教授の原理

### 1. 内容構成原理

ASの内容構成について、次の3つの原理を指摘できる。

第1の原理は、多様な社会集団・階層に属する人間の、社会生活における活動領域と社会生活空間の拡大過程を通してみた行為の変化のパターンと、マクロな社会構造・変動との因果関係を教育内容として構成するということである。具体的には、学習で考察する人間群は、人種・民族、性、階級、年齢を基本カテゴリーに選択される。そうした人間の行為が展開する社会生活空間の拡大過程は、アメリカ合衆国におけるフロンティア・ラインの移動過程（西漸運動の過程）と都市化の進行過程を軸に内容構成される。また、社会生活における主要な活動領域として、アメリカ人の「身体的・物質的生活領域」を代表する「労働」領域と、「精神的・文化的生活領域」を代表する「教育」「宗教」「娯楽・大衆文化」領域から单元主題が選択され内容構成される。

第2の原理は、人間行為の変化のパターンと、社会構造・変動との因果関係を考察していくために、社会・経済・



表 5. 社会生活領域史と社会生活拡大史を統合した単元展開

単元	パート	主な学習問題・学習活動	主な学習内容
単元5・小単元1	A	<p>1700年ごろマサチューセッツに生活した農夫一家フレッチャー家は、夫婦と8人の子供(6人の息子と2人の娘)の家族である。フレッチャー家の日常生活史についての引用文と当時の植民地農村風景の挿絵を参考にして、次の質問に答えなさい。</p> <p>1. ピューリタン家族における家長の義務と責任は、今日の父親のそれとどのように異なっていますか。</p> <p>2. 現代の妻たちは、フレッチャー夫人のような生活に満足すると思えますか。そのように考える理由は何ですか。</p> <p>3. フレッチャー家は親密性の高い家族だと考えますか。そのように考える理由は何ですか。</p> <p>4. 家族の成員は世帯にどのような貢献をしていますか。</p>	<p>家長は世帯を代表し、投票権を持っていた。 家長は家計を掌握し、財産権を保持していた。 家長は家族の秩序の維持にも責任を負っていた。 夫は妻に常に勤勉節約に努めることを求めた。 妻には財産権はなく、訴訟を起こすこともできなかった。 満足しないだろう。植民地社会の女性は家内作業を一手に引き受け、働いているのに、男性に対して地位が低すぎる。 ○植民地家族の親密性は高くない。家長が家族の自由を奪っているのではないか。子供の死に対してもあまり悲しんでいないようだ。妻は夫に従属しており、夫婦の愛情が感じられない。 ○植民地家族の親密性は高いのではないか。家族の成員皆が家族を支えるために働いている。ピューリタン信仰により家族は結びついている。 家族の成員皆が家計を維持するために働いた。子供たちはいつも学校にいけるわけではなかったが、大人や兄弟姉妹との生活を通じて、生きる方法やしつけを学んでいった。</p>
	B	<p>都市化の進む1900年ごろのアイオワ州クレアモントでトムソン一家は薬局を営んで生活していた。トムソン夫妻には10代の4人の子供がいる。また、子供が自立して夫婦だけになったアンダーソン夫妻と3年前から同居している。トムソン家の日常生活史に関する引用文と当時の典型的な中流家族一家の団欒の写真を参考にして、次の質問に答えなさい。</p> <p>1. トムソン家とフレッチャー家では、子どもの処遇に関してどのような違いがありますか。</p> <p>2. クレアモントのような新興都市で暮らす1900年ごろの家族は、植民地農業家族と比べて、親密性の高い家族と言えるだろうか。そのように考える理由は何ですか。</p> <p>3. 植民地時代のフレッチャー夫婦が年老いてからの暮らしについてどのように想像できますか。1900年ごろのトムソン夫妻や同居人のアンダーソン夫妻についてはどうですか。</p>	<p>フレッチャー家では、子供も家計を支えるための役割を持ち、基本的には大人と同様に扱われた。フレッチャー家の子供たちは、14才くらいで他の家庭に奉公に出ている。 トムソン家では、子供は小遣いや衣類など親から世話を受けている。トムソン家の子供たちのうち職を得ている年長の2人は、親から離れて生活している。家にいる年少の子供たちは、それぞれに釣りやデートなど自分らしい時間を楽しんでいる。 ○トムソン家の家族の親密性は高いと言える。家族が愛情によって結ばれている。トムソン家は、子供の世話に手間と時間をかけている。 ○トムソン家の家族の親密性は、植民地時代の家族と比べて、必ずしも高いとは言えない。子どもたちは成長すると家から独立し、年老いた父母が家に残されていく。トムソン家の家族は、成員がそれぞれの趣味や娯楽を楽しんでいる。 フレッチャー夫妻は、年老いてからも大家族の中で生活しているであろう。 自営業のトムソン夫妻は家を継ぐ親族と同居しているかもしれない。後継者がいなければ老夫婦だけの世帯になるかもしれない。 アンダーソン夫妻は、すでに子供が独立して離れて世帯を構えているので、老後は夫婦だけの生活になるだろう。</p>
	C	<p>ジョンソン一家は、現代のニュージャージー州カムデンに住まいし、空調機器会社に勤める夫と事務職の妻、2人の子供(17歳、12歳)の4人家族である。ジョンソン一家の日常生活に関する引用文と工業都市に暮らす現代の共働き家族の日常を写した写真(夫婦で食事の片付けをしている様子)を参考に、次の質問に答えなさい。</p> <p>1. ジョンソン家は、現代アメリカの典型家族と見ることができますか。そのように考える理由は何ですか。</p> <p>2. フレッチャー家やトムソン家と比較して、ジョンソン家の強みと弱みは何だと思いますか。</p>	<p>○典型家族である。核家族で共働き家族である。夫婦が対等の関係にあるようだ。 ○必ずしも典型家族ではない。家族そろっての食事も満足に取れない。子供は自分達の趣味や友人関係をもっていて、両親との会話の機会が十分でない。 ○ジョンソン家では、夫婦が対等の関係を保っている。ジョンソン家は、育児・教育や娯楽などを家庭以外の社会機関に求めることができる。家族の成員がそれぞれにしたい事を持ち、自己実現できる。 ○核家族で地域や社会関係から孤立しやすい。家族の成員がバラバラになりやすい。生活にゆとりが感じられない。</p>
総括討論		<p>1. 19世紀半ばに絵画に描かれた典型的なアメリカ家族(中産階級家族像)とあなたがイメージする現代の典型家族を比較して、家族観の異同について話し合いなさい。</p> <p>2. 家族における夫婦(男女)の役割分担のあり方について話し合いなさい。 (討論課題3は省略)</p>	

政治・文化・人口など行為の変化に及ぼす複数の要因を取り込んだ総合的・包括的な時代区分に基づいて内容を配列していくということである。ASの場合は、アメリカ合衆国史を、17・18世紀－19世紀－20世紀の3つの時代に区分し、内容を配列している。

第3の原理は、歴史における人間行為と社会構造との関係性により、社会生活空間や社会生活における活動領域に具体的に現れた社会的論争問題や価値論争問題を選択し構成するということである。ASにおける単元の主題は、現在の社会生活における問題領域も表現しているのである。

## 2. 学習方法原理

ASにおける社会生活史教授は、歴史過程を生きた多様な人間の社会生活における問題解決的行為の意味の理解を原理に展開していると考えることができる。具体的には、次のような学習過程で展開しているといえよう。<sup>12)</sup>

- ①アメリカ史上の多様な人間の社会生活における行為の事実を明らかにする。
- ②対立を含む複数の行為の意味を、目的（願望、動機）・手段（工夫、努力）・結果（社会的意味・影響）の連関において理解する。
- ③目的的な行為とその背後にある意識を比較・対照して、特定の時代の社会構造の特質や価値観・規範の傾向性を把握する。
- ④歴史上の人間の行為の意味理解を通して、現在および未来における学習者自身の社会生活における諸問題の解決にむけての行為目標と価値観・規範を選択し決定する。

この方法原理に基づいて、ASにおいて具体的にとられている主要な学習方略は、「歴史上の問題解決的行為に関する物語教材の解釈」と、「社会的論争問題・価値論争問題に対する討論」である。

「物語教材の解釈」は主に上記学習過程の①②③の段階で、「討論」は主に学習過程の④の段階で用いられ、学習展開を促進しているのである。

## III 社会生活史教授の意義

現在社会研究としての社会生活史教授という観点から、ASの意義と課題について指摘する。

ASの意義としては、次の2点を指摘できよう。

第1の意義は、子どもが、普段、経験的・主観的に捉えている現在の社会生活を、庶民の諸活動とそれが営まれる生活空間・環境、さらにその背景にある社会構造・変動の各側面を包括して歴史的視野から捉え対象化し理解できることである。

第2の意義は、ASが、合衆国社会史において展開し

た価値対立を含む多様な人間群の問題解決的行為の目的・動機の解釈・比較・評価を通じて、子どもたち自身が、現在の社会生活における自己の行為決定の基盤となる価値観・規範を評価し選択していく授業過程を組織することにより、社会生活史教授を通じた子どもの開かれた価値観形成を促していることである。

しかし、ASは、次の点に課題も残している。ASの学習では、庶民の行為が、主として経済・社会・文化領域から選択され、それら行為と社会構造との因果関係の考察は、主に経済的・社会的・文化的構造との関係の考察を中心になされている。そして、行為と社会構造との関わり合いから生じた社会問題に対処するために取られた庶民の政治的行動や政治制度の側からの対応といった内容は、「女性」単元（単元6）に断片的に取り込まれているだけである。ASは、生活者の行為を分析軸とする「社会生活史」から「政治史」への教育内容の展開の論理が不明確なものになっているのである。

ASは、その意義と課題を踏まえて、現在社会理解を目的とする「社会科歴史」のひとつの展開モデルを提案したものとして評価できる。

## 【注】

- 1) 「社会科歴史」の性格およびその教授の論理については、次の文献に学んだ。
  - ・森分孝治「歴史教材構成の論理（I）－社会認識教育としての歴史教授－」日本社会科教育研究会編『社会科研究』24号、1976、pp.1-20.
  - ・森分孝治『アメリカ社会科教育成立史研究』風間書房、1994、pp.410-414.
- 2) 「社会生活史」を歴史認識の方法概念として捉える見方とその論理については、次の文献に詳しい。
  - ・Peter N.Stearns, "Social History and the Teaching of History", Matthew T.Downey, ed., *Teaching American History: New Directions*, The National Council for the Social Studies, Bulletin No.67, 1982, pp.51-63.
- 3) Frank Alweis, *Our Social And Cultural History: American Studies*, Textbook, Globe Book Company, 1977, pp.2-3., p.183.
- 4) Frank Alweis, *Textbook*, pp.vi-ix. より筆者作成。
- 5) Frank Alweis, *Textbook*, pp.4-181. および, Frank Alweis, *Our Social And Cultural History: American Studies, Teaching Guide*, Globe Book Company, 1977, p.3. より筆者作成。
- 6) アメリカ史研究者・有賀貞によれば、アメリカ史の展開を、18世紀－19世紀－20世紀と、世紀の変遷と結び付けて区分することは、技術的進歩、経済の発展、人口移動や民族構成の変化、国内政治および対外

関係の変容、思想の変遷などを総合的・包括的に考慮して、アメリカ社会「一般史」を理解するのに適切であるとされる。

・有賀貞『アメリカ史概論』東京大学出版会、1987、pp.28-30.

7) Frank Alweis, *Textbook*, pp.4-18. pp.160-166. および Frank Alweis, *Teaching Guide*, pp.11-12. より筆者作成。

8) Frank Alweis, *Textbook*, pp.6-7.

9) ターナーのフロンティア学説の内容については、次の文献を参考に整理した。

・松尾式之、大西健夫編『アメリカの社会—多様性の中に統一を求めて—』早稲田大学出版部、1994、

pp.29-30.

・富田虎男「ターナーのフロンティア学説」松村赳、富田虎男『英米史辞典』研究社、2000、p.277.

10) Frank Alweis, *Textbook*, pp.84-91. および, Frank Alweis, *Teaching Guide*, pp.9-10. より筆者作成。

11) Frank Alweis, *Textbook*, pp.108-123. および, Frank Alweis, *Teaching Guide*, pp.10-11. より筆者作成。

12) 「理解」を原理とする歴史学習の展開については、次の文献を参照した。

・小原友行「小学校歴史学習の性格と年間指導計画作成の視点」星村平和編著『小学校歴史学習の理論と実践』東京書籍、1991、pp.37-41.

# **A Theory on the Teaching History for Contemporary Social Studies: Social History Approach**

Masami UMEZU

The aim in this paper is to clarify the theory on the teaching history for contemporary social studies based on social history.

In this paper, I will examine the American Studies Program for 7 · 8th graders, "Our Social and Cultural History" developed by Frank Alweis in the U.S.A.

The results of analysis are as follows:

- (1) The principal goal of this program is to make students foster the sense of trend, develop the ability to assess the quality of contemporary society through understanding how and why American life and society have developed into what it is today.
- (2) Key elements of the methodology are:
  - ① to organize the instructional contents to conceptualize the process of modernization by examining social structure, social consciousness, and social issues from the viewpoint of social activities of ordinary people and expanding social life space.
  - ② to develop the learning process from the step to interpret motivations for action, and meanings using narrative readings to the step to examine value-related issues in historical context by class-discussion.